

# 位置変化動詞と結果の副詞句

川野靖子\*

キーワード：位置変化動詞、副詞句、結果構文、二格、場所

## 要 旨

状態変化動詞がサマの変化を表すのに対し、位置変化動詞は対象の存在位置の変化を表し、サマの変化は含意しない。そのため位置変化動詞は、状態変化動詞とは異なり、結果の副詞句をとりにくいという特徴をもつ。しかし実際には、位置変化動詞であっても、「壁に写真を大きく飾った」「山に雪が白く積もった」のように、結果の修飾関係を構成している例がみられる。

本稿では、位置変化動詞が結果の修飾関係を構成するのはどのような場合か(現象の成立条件)、そしてなぜそうした現象が成立し得るのか(現象の背景)という点を中心に分析を行った。その結果、上記の現象は副詞句が存在のあり方を表す場合(ex. 壁に写真を大きく飾った)と内的属性を表す場合(ex. 山に雪が白く積もった)の2つに分かれること、そして、前者の場合は存在のあり方と位置変化の意味との馴染みやすさが、後者の場合は当該の文にみられる発生構文との類似性が、結果の修飾関係を可能にしていることが明らかになった。

本稿の分析は、位置変化と状態変化の峻別という基本的な立場を保持したまま当該の現象が説明できることを示したものであり、変化動詞の包括的記述に寄与するものである。

## 1. はじめに

### 1.1. 目的

次の例では「大きく」「白く」などの副詞句が「～ニ…ヲ飾る／～ニ…ガ積も

---

\* e-mail address:kawano@fwu.ac.jp

る」という位置変化を表す動詞句と共に起し、結果の修飾関係を成立させている<sup>\*1</sup>。

- (1) 壁に写真を大きく飾った
- (2) 山に雪が白く積もった

しかし位置変化動詞は本来、結果の副詞句をとりにくい動詞である(仁田1983、矢澤2000等)。状態変化動詞とは異なり、位置変化動詞が表すのは対象<sup>\*2</sup>の存在場所の変化であってサマの変化ではない。したがって結果の修飾関係の被修飾成分になりにくいのである。実際、同じく位置変化を表す次の(3)(4)では、結果の修飾関係が成り立たない。

- (3) テーブルに荷物を(\*大きく)置いた
- (4) 黒板にマグネットを(\*白く)付けた

つまり冒頭の(1)や(2)のような現象は、限られた現象であるといえる。

それでは(1)や(2)において結果の修飾関係が成立するのはなぜであろうか。本稿では位置変化動詞が結果の修飾関係を構成する現象について、その成立条件と現象の背景を明らかにする。

## 1.2. 基本的な立場

具体的な議論に入る前に、位置変化動詞と状態変化動詞の違いという観点から、(1)や(2)の現象について重要な点を確認しておきたい。

(1)の「壁に写真を大きく飾った」という文の「大きく」は「飾る」という動詞の結果相を修飾してはいるが、この文は出来事の前後で写真の大きさが変化したことを表すわけではない。また(2)の「山に雪が白く積もった」という文も、雪の色

---

\*1 「結果の修飾関係」の定義は矢澤2000による。矢澤2000は、「結果の修飾関係は、モノの状態を表す修飾成分が被修飾成分である動詞の変化の側面を修飾対象として構成する修飾関係である。」(p. 205)と規定している。また本稿では、結果の修飾関係を構成する修飾成分を「結果の副詞句」と呼ぶ。

\*2 本稿では、他動詞文のヲ格句、及び変化自動詞文のガ格句の意味役割を「対象」とする。また、位置変化動詞文のニ格句の意味役割を「場所」とする。

が別の色から白い色に変わったことを表すわけではない。実はこうした特徴は(1)(2)だけでなく、位置変化動詞が結果の修飾関係を構成する例のほとんどの例にみられる特徴である(詳細は注4を参照のこと)。

一方、状態変化動詞文ではサマの変化は必須的である。たとえば「風船を大きくふくらました」という状態変化動詞文は「出来事の前後で風船の大きさが変わらない」という解釈を許さず、また「皿を粉々に割った」という文も「割る前から皿が粉々だった」という解釈を許さない。

以上からいえることは、位置変化動詞はたとえ結果の修飾関係を構成できたとしても、サマの変化を表すわけではないということである。位置変化動詞の語彙的意味に含まれる変化は位置変化のみであって、状態変化は含まれない。したがって(1)や(2)の現象を、「当該の動詞には状態変化の意味も含まれている」といった観点から考察するのは適切ではないといえる。あくまでも位置変化と状態変化を峻別する立場から、「位置変化しか表さない動詞が結果の修飾関係を構成し得るのはなぜか」という点を考察する必要があるのである。

以下ではこのような立場から、位置変化動詞文における結果の修飾関係について詳しく論じていく。

## 2. 存在のあり方を表す副詞句

冒頭で述べたとおり、位置変化動詞は基本的に結果の副詞句をとりにくい。しかし厳密には、ある特定の意味カテゴリーの副詞句に限っては、位置変化動詞との共起が生産的であるという事実がある。この意味カテゴリーを井本2001では「対象物の向き・姿」と規定している<sup>\*3</sup>。用例を以下に示す。

- (5) シャツに名札をさかさまに付けた (井本2001 p.180)  
 (6) 生徒が校庭にまっすぐに並んだ (矢澤2000 p.207改)

(5)の「さかさまに」は位置変化後の「名札」の向きを表し、(6)の「まっすぐに」

\*3 同様の現象が、三井1992、今西1995、影山1996、仁田1997でも指摘されている。ただし今西1995はこの種の副詞句を「静的様態の副詞」、影山1996は「結果様態」とし、結果の副詞句(影山1996では結果状態)とは区別している。

は「生徒」の配置・姿を表している。これらの例で重要な点は、副詞句の表すサマが対象の内的属性ではなく、対象の存在のあり方だという点である。位置変化動詞は対象の内的属性には言及しないが、向きや姿といった、存在に付随するサマであれば表し得る。この種の副詞句に限って位置変化動詞との共起が生産的である理由はこの点にあると考えられる<sup>\*4</sup>。

ここで本稿の冒頭に挙げた例文の(1)に戻ってみたい。以下に再掲する。

(7) 壁に写真を大きく飾った (=(1))

上記の例で注意されたいのは、「大きく」が対象の内的属性を表してはいないという点である。(7)が表すのは「写真」の物理的な大きさが変化したということではなく、対象の場所に占める面積が大きいということである。つまり(7)の「大きく」は、「さかさまに」や「まっすぐに」と同様、対象の存在のあり方を表すといえる。

ただし「さかさまに」「まっすぐに」等の向き・姿を表す副詞句が位置変化動詞と容易に共起するのに対し、「大きく」「小さく」といった大きさに関する副詞句が位置変化動詞と共起する例は非常に限られている。たとえば次の(8)(9)はいずれも不適格である。

(8) テーブルに荷物を (\*大きく) 置いた (=(3))

(9) 食器棚にグラスを (\*小さく) 入れた

「大きく」「小さく」等の副詞句と位置変化動詞の共起が制限的であることは、これらの副詞句が通常は内的属性を表す場合が多いことに起因する。たとえば「風船を大きくふくらました」のような状態変化動詞文において、「大きく」は対象の物理的な大きさを表す。「大きく」や「小さく」が存在のあり方を表す副詞句として位置変化動詞と共起するためには、何らかの条件が必要になるのである。

---

\*4 ここで挙げた向き・姿を表す位置変化動詞文にも、(1)(2)と同様、サマの変化が必ずしも含意されないという特徴が観察される。たとえば(5)の「シャツに名札をさかさまに付けた」は位置変化前の名札がさかさまでなかったことを意味しない。さかさまに持っていた名札をそのままシャツに付けたという解釈が十分成り立つのである。(6)についても同様のことがいえる。

それではどのような条件が必要なのであろうか。先の(7)をはじめ「大きく」「小さく」が位置変化動詞と共起している例を観察すると、鑑賞や広告を目的とした展示行為の場合に成立しやすいことがわかる。用例を以下に挙げる。

- (10) 壁に写真を大きく飾った (=(7))  
 (11) 掲示板に合格者の一覧表を大きくはり出した  
 (12) キャンパスの隅に小さく置いたスマイルの花 (矢澤2000 p.207)

場所に対象を位置づけてそれを人に見せることを目的とした展示行為において、はじめて、展示物である対象がその場所のどのくらいの面積を占めるかという観点が生まれ、「大きく、小さく」が存在のあり方を修飾する副詞句として位置変化動詞と共起しやすくなると考えられる。

### 3. 内的属性を表す副詞句

次に本稿の冒頭に挙げたもう1つの例を分析する。例文(2)を以下に再掲する。

- (13) 山に雪が白く積もった (=(2))

上の(13)には、前節で取り上げた存在のあり方を表す副詞句にはみられない特徴が2つある。第1に、「白く」が表すのが対象(雪)のサマなのか場所(山)のサマなのか、一見したところ判然としない。第2に、(13)の「白く」は内的属性を表しており、存在のあり方を修飾しているとは考えられない。以上の点から、(13)の現象については前節とは異なる観点からの説明が必要となる。

以下では、まず3.1.で1つ目の問題、すなわち副詞句と名詞句の意味的關係について本稿の立場を明らかにし、その後3.2.で2つ目の問題、すなわちなぜ内的属性を表す副詞句が位置変化動詞と共起できるのかという問題を考察する。

#### 3.1. 名詞句との意味的關係

(13)に関する先行研究の見解は、「白く」が場所の状態を表すとする立場(堀川1993、仁田2002)と、対象の状態を表すとする立場(矢澤2000)の2つに分かれている。

場所の状態を表すとする立場の根拠は、「雪」は元々白いのであって、積もった結果白くなるわけではないという点にある。

一方、対象の状態を表すとする立場は、結果の副詞句の統一的な扱いという見地から前者の立場に異議を唱えている。結果の副詞句は対象の状態を表すのが通常であり、その他の名詞句との間に意味的関係を結ぶことはない<sup>\*5</sup>。したがって、(13)で「白く」が場所の状態を表すとした場合、なぜ一部の例にのみ対象以外の名詞句と意味的関係が成立するのかという問題が生じてしまうのである。

このように両者の立場にはそれぞれ根拠があるが、本稿は結果の副詞句の統一的な扱いを重視し、後者の立場、すなわち(13)の「白く」が表すのは「雪」の状態であって「山」ではないとする立場をとる。ただしその場合、元々白いはずの雪の状態をなぜ「白く」が修飾できるのかという問題が残される。この点については先に提示した2つ目の問題、すなわち内的属性を表す「白く」が位置変化動詞と共にできるのはなぜかという問題とあわせて3.2.で論じることとする。

### 3.2. 発生構文との連続性

「白く」のような内的属性を表す副詞句が位置変化動詞と共に起る例には先の(13)の他、次の(15)(16)等がある。

- (14) 山に雪が白く積もった (= (13))  
(15) 肉に小麦粉を白くまぶした  
(16) バッタの死骸にアリが黒く群がっている

しかし前述のようにこうした例は限られており、次の(17)～(19)が示すように位置変化動詞は内的属性を表す副詞句をとらないのが普通である。

- (17) 黒板にマグネットを(\*白く)付けた (= (4))  
(18) 地面にボールが(\*白く)落ちている  
(19) テーブルにりんごを(\*赤く)置いた

それでは(14)～(16)が成立するのはなぜであろうか。(14)～(16)を観察すると、位置変化の前後で対象のとらえ方が異なるという共通した特徴が得られる。たとえば

---

\*5 たとえば「テーブルにグラスがさかさまに並んでいる」の解釈は「グラスがさかさま」であり、別の解釈(テーブルがさかさま)は成り立たない。

(14)の「雪」について言えば、積もる以前の「雪」とは異なり、積もった後の「雪」は「層としての雪」である。また(15)の「小麦粉」と(16)の「アリ」も位置変化の前後でそのとらえ方が異なっており、結果相ではそれぞれ「薄い膜状の小麦粉」、「集団としてのアリ」になる。「雪」や「小麦粉」「アリ」それ自体は出来事を通じて常に存在する既存物であるが、「層としての雪」「薄い膜状の小麦粉」「集団としてのアリ」は、結果相において、はじめて出現する。

こうした特徴は、内的属性を表す副詞句の共起しない(17)～(19)にはみられない。(17)～(19)の「マグネット」「ボール」「りんご」は出来事を通じて同じ形態で存在するのであって、別の姿の実体として新たに出現することはない。

このように考えると、「白く」「黒く」等が位置変化動詞文に現れる現象は、当該の文の発生構文との近さという観点から説明することができる。発生構文とは、「枝に柿が実る」「地面に穴を掘る」のような、ある場所に対象が出現することを表す場所表現であるが、「枝に柿が赤く実る」「地面に穴を深く掘る」のように結果の副詞句をとりやすいという特徴がある(矢澤2000)<sup>\*6</sup>。位置変化と発生とは、対象が既存物であるか発生物であるかによって区別されるが、どちらも場所表現であり、語順によって解釈が揺れるなど、連続性を持つ(和氣1996<sup>\*7</sup>)。本稿で問題にしている(14)～(16)は対象が既存物であるから本来的な発生構文ではないが、先に述べたように対象の認識の仕方によって「層としての雪」「薄い膜状の小麦粉」「集団としてのアリ」が新たに出現したととらえることが可能である。こうした発生構文への近づきを条件として、「白く」「黒く」等の副詞句と位置変化動詞の間に結果の修飾関係が成立すると考えられる。

また、副詞句との意味的關係を対象に認めた場合(つまり、「白く」が表すのは「雪」の状態であるとした場合)、なぜ元々白いはずの雪の状態を「白く」が修飾できるのかという問題があったが、本稿の説明ではこの問題も解消される。「白く」が表しているのは出来事を通じて存在する実体としての雪ではなく、結果相において出現した層としての雪の状態である。「山に雪が白く積もった」という文は、雪が積

\*6 本稿の筆者は、発生動詞が結果の副詞句をとりやすいのは、対象の出現を表すことで対象に付随するサマの出現をも表すことになるためではないかと考えている。

\*7 和氣1996は「汗が背中に流れる」と「背中に汗が流れる」について、前者の「背中に」が到達点としての解釈を受けやすいのに対し、後者の「背中に」は出現点の解釈を受けやすくなると述べている。

もった結果の、層としての雪を白いと認識したということを表す表現であるといえる。

#### 4. まとめ

以上、位置変化動詞が結果の修飾関係を構成する例を取り上げ、現象の成立条件と背景を考察した。

本稿の結論をまとめると次のようになる。当該の現象は、副詞句が存在のあり方を表す場合(ex. シャツに名札をさかさまに付けた／壁に写真を大きく飾った)と、内的属性を表す場合(ex. 山に雪が白く積もった)の2つに分けられる。前者の場合は、存在のあり方と位置変化の意味との馴染みやすさが結果の修飾関係を可能にしておき、「大きく」のような大きさに関する副詞句でも、展示行為という限定された条件の下では存在のあり方を表す副詞句として位置変化動詞と共起しやすくなる。後者の場合は、当該の文が「層としての雪」といった対象の新たな形の出現を表しており、同じ場所表現である発生構文との連続性から、結果の修飾関係が可能になる。

最後に、本稿の意義について述べたい。本稿は、位置変化と状態変化の峻別という基本的立場が、位置変化動詞が結果の修飾関係を構成するという一見例外的な現象においても保持されることを示したものである。加えて、本稿では、結果の副詞句のふるまいに関しても統一的な説明を行った。具体的には、「山に雪が白く積もった」等の位置変化動詞文が発生構文と連続的であることを指摘し、「結果の副詞句が対象以外の名詞句と意味の関係を持つ場合がある」といった例外的な記述を不要のものとした。以上のように本稿は、一見例外的な現象を、動詞や副詞句の基本的特性に基づいて説明したものであり、この成果は変化動詞の包括的な記述・説明に寄与するものであるといえる。

#### 参考文献

- 今西利之1995「動きの過程と様態の副詞」『さわらび』4, pp.34-46, 神戸文法研究会。  
井本亮2001「位置変化動詞の意味について—副詞句の解釈との対応関係と語彙概念構造—」『日本語文法』創刊号, pp.177-197。  
上野誠司・影山太郎2001「移動と経路の表現」影山太郎(編)『日英対照 動詞の意味と構文』pp.40-68, 大修館書店。



- 奥津敬一郎1983「変化動詞文における形容詞移動」渡辺実(編)『副用語の研究』, pp. 317-339, 明治書院.
- 影山太郎1996『動詞意味論－言語と認知の接点－』くろしお出版.
- 影山太郎2001「結果構文」影山太郎(編)『日英対照 動詞の意味と構文』pp. 154-181, 大修館書店.
- 川野靖子1997「位置変化動詞と状態変化動詞の接点－いわゆる「壁塗り代換」を中心に－」『筑波日本語研究』2, pp. 28-40, 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室.
- 川野靖子2001「ラ格句を伴う移動動詞句について－アスペクト的観点からの動詞句分類における位置づけ－」『日本語と日本文学』33, pp. 25-38, 筑波大学国語国文学会.
- 川野靖子2002「自動詞文における二種類の代換現象と所有関係－「N<sub>1</sub>ガ N<sub>2</sub>デ～」と「N<sub>1</sub>ガ N<sub>2</sub>ニ～」の違いを中心に－」『日本語文法』2-1, pp. 22-42.
- 川野靖子2003「現代日本語の格交替に関する研究－位置変化と状態変化の接点－」筑波大学博士学位論文.
- 新川忠1979「『副詞と動詞とのくみあわせ』試論」言語学研究会(編)『言語の研究』pp. 173-202, むぎ書房.
- 新川忠1996「副詞の意味と機能－結果副詞をめぐって－」言語学研究会(編)『ことばの科学』7, pp. 61-80, むぎ書房.
- 杉本武1995「移動格の「を」について」『日本語研究』15, pp. 120-129, 東京都立大学国語学研究室.
- 鈴木泰1979「情態副詞の性質についての小見」『山形大学紀要(人文科学)』9-3, pp. 287-321, 山形大学.
- 竹沢幸一1995「「に」の二面性」『言語』24-11, pp. 70-77, 大修館書店.
- 竹沢幸一2000「空間表現の統語論－項と述部の対立に基づくアプローチ－」青木三郎, 竹沢幸一(編)『空間表現と文法』pp. 163-214, くろしお出版.
- 中北美千子1995「結果の副詞について－様態の副詞・程度表現との相関－」『国文目白』34, pp. 67-74, 日本女子大学国語国文学会.
- 中北美千子1996「結果の副詞の適格性に関する意味的要因」『日本語教育』89, pp. 123-132.
- 仁田義雄1983「結果の副詞とその周辺－語彙論的統語論の姿勢から－」渡辺実(編)『副用語の研究』pp. 117-136, 明治書院.
- 仁田義雄1997「日本語文法研究序説－日本語の記述文法を目指して－」くろしお出版.

- 仁田義雄2002『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』くろしお出版.
- 堀川智也1993「二格名詞の結果を表す「結果の副詞」について」『日本語教育』80, pp. 115-124.
- 松本曜1997「空間移動の言語表現とその拡張」中右実(編)『日英語比較選書6 空間と移動の表現』pp. 125-230, 研究社出版.
- 三井正孝1992「他対応の意味的類型」『日本語と日本文学』16, pp. 21-30, 筑波大学国語国文学会.
- 三宅知宏1996「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110, pp. 143-168.
- 森田良行1977『基礎日本語』1, 角川書店.
- 森山卓郎1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
- 矢澤真人1983「情態修飾成分の整理－被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察－」『日本語と日本文学』3, pp. 30-39, 筑波大学国語国文学会.
- 矢澤真人2000「副詞的修飾の諸相」仁田義雄, 村木新次郎, 柴谷方良, 矢澤真人(著)『日本語の文法1 文の骨格』pp. 187-233, 岩波書店.
- 和氣愛仁1996「「に」の機能」『筑波日本語研究』創刊号, pp. 59-72, 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室.
- Washio, Ryuichi 1997. Resultatives, compositionality and language variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6, pp.1-49.

かわの やすこ／福岡女子大学文学部専任講師  
(2003年9月2日 受理)